

英語教育の研究

高梨芳郎

2014年度の英語教育の動向について概観する。文部科学省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（2013年12月）を具体化するため、英語教育の在り方に関する有識者会議を開催し、その審議結果を5つの提言にまとめ、2014年9月26日に発表した。教育課程や教員養成等については中央教育審議会等で今後さらに検討を行うことになるが、その提言内容は、①国が示す教育目標・内容の改善、②学校における指導と評価の改善、③高等学校・大学の英語力の評価及び入学者選抜の改善、④教科書・教材の充実、⑤学校における指導体制の充実で、小学校から大学までを包括するものであった。小学校中学年から外国語活動を開始して高学年から教科化を実施し、中学校卒業段階で英検3級程度以上、高等学校卒業段階で英検2級～準1級などの到達目標を定め、思考力・判断力・表現力等を育成する教科用図書・教材の充実を図り、コミュニケーション能力の育成をより重視する趣旨であった。大学では「教科に関する科目」などの教職課程の科目内容も学習指導要領や教育実践との関連性を深める方向で改善と見直しを図る提言がなされた。

日本の英語教育の在り方を巨視的な視点から論じた著作が出版された。公教育での英語教育の目的を根本から問いかける書として、江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄著『学校英語教育は何のため？（ひつじ英語教育ブックレット）』（ひつじ書房2014.7）がある。鳥飼玖美子著『英語教育論争から考える』（みすず書房2014.8）は英語教育論争の論点を整理し、独自に目的論を提示する。外国語学習は日本語にない世界を知り、世界と繋がるコミュニケーションを可能にすると説く。小学校での英語教育について担任教員による「ことば」としての英語教育の再創造を提唱する書として柳瀬陽介・小泉清裕著『小学校からの英語教育をどうするか（岩波ブックレット）』（岩波書店2015.3）がある。

日本人と英語教育論では、日本人に馴染み深い文法・読解中心の英語教育の効用を説いた書として行方昭夫著『英会話不要論（文春新書）』（文藝春秋2014.10）がある。寺沢拓敬著『「日本人と英語」の社会学——なぜ英語教育論は誤解だらけなのか』（研究社2015.1）は、「日本人は英語下手」などの通説を統計データを基に論じた希有な書である。若年層、富裕層、専門職の女性など層別標本抽出の精度とともに結論の客観性・斬新性に特長があり、説得力に富む。松井力也著『日本人のための英語学習法（講談社学術文庫）』（講談社2015.3）は、英語話者の独特な思考方法に立ち、英文法の核心に触れる書である。

回顧と展望

英語授業論については、佐藤臨太郎・笠原究・古賀功著『日本人学習者に合った効果的英語教授法入門——EFL環境での英語習得の理論と実践(英語教育選書)』(明治図書出版 2015.1)がある。日本の中学校・高等学校で活用できるPPPを改善した文法指導、語彙指導、動機づけ、学習指導の工夫について詳述する。英語教師としての豊富な体験をふまえた教育論として、三浦孝著『英語授業への人間形成的アプローチ——結び育てるコミュニケーションを教室に』(研究社 2014.9)、静哲人・正頭英和・小林翔著『英語授業の心・技・愛——小・中・高・大で変わらないこと』(研究社 2014.11)、菅正隆・中嶋洋一・田尻悟郎編著『英語教育ゆかいな仲間たちからの贈りもの2』(日本文教出版 2014.12)がある。樋口忠彦・高橋一幸編著『Q&A 中学英語指導法事典——現場の悩み152に答える』(教育出版 2015.1)と柳瀬陽介・組田幸一郎・奥住桂編『英語教師は楽しい——迷い始めたあなたのための教師の語り』(ひつじ書房 2014.8)も同様の趣旨である。これらのベテラン教師の教育論はいずれの著作も具体的に説得力に富む内容である。

語彙指導の分野では、投野由紀夫著『発信力をつける新しい英語語彙指導——プロセス可視化とチャンク学習』(三省堂 2015.3)と安木真一著『英語力がぐんぐん身につく! 驚異の英単語指導法 50(目指せ! 英語授業の達人)』(明治図書出版 2014.5)がある。前者はコーパス言語学の活用で、後者は教室での指導技術に特色がある。文法指導については、田中武夫・田中知聡著『英語教師のための文法指導デザイン』(大修館書店 2014.6)と卯城祐司編著/江原一浩・久保野雅史・久保野りえ・末岡敏明・平原麻子・深澤真・松下信之・山岡大基著『英語で教える英文法——場面で導入、活動で理解』(研究社 2014.6)が詳しい。いずれも理論と実践の両面から価値が高い。ライティング指導については学習者のライティング・プロセスへの教師の介入について、ライティング評価も含めて調査した研究書として佐藤雄大著『対話を用いた英語ライティング指導法——ダイアログ・ジャーナル・ライティングで学習者をサポートできること』(溪水社 2015.3)がある。曾根田憲三・羽井佐昭彦・宮本節子・堤龍一郎・上條美和子・上原寿和子・Gary Bourke 著『英語の授業を英語でおこなうための表現集』(開文社出版 2014.11)は英語で授業を行う際の参考書になる。

教室での指導技術の紹介として、田尻悟郎著『田尻悟郎の英語教科書本文活用術! ——知的で楽しい活動&トレーニング集』(教育出版 2014.11)がある。教科書本文の「料理」手法は興味深く、明日の実践の糧になる。瀧沢広人著『クラス全員のやる気にスイッチが入る! 英語授業のつくり方』(学陽書房 2014.7)と佐藤一嘉編著『ワーク&評価表ですぐに使える! 英語授業を変えるパフォーマンス・テスト〈中学3年〉(授業をグリーンと楽しくする英語教材シリーズ)』(明治図書出版 2014.6)も参考になる。授業でのICTの活用事例として唐澤博・米田謙三著『英語デジタル教材作成・活用ガイド』(大修館書店 2014.7)がある。

ここで海外の研究に目を向ける。第二言語教育を包括的に扱った書として、教室での学習者中心の指導法を4技能から評価まで丹念に論じた David Nunan. *Teaching English to Speakers of Other Languages: An Introduction* (Routledge 2015.2)がある。David Nunan & Jack C. Richards. (Eds) *Language Learning beyond the Classroom* (ESL & Applied Linguistics Professional) (Routledge 2014.10) はインターネット、テレビ、留学など教室外での言語学習の事例研究として興味深い。第二言語教育に関連する世界の英語、コーパス言語学、会話分析、言語行為論などを扱った書として Joan Cutting. *Language in Context in TESOL* (Edinburgh Textbooks in TESOL) (Edinburgh University Press 2015.2)がある。Garold Murray. (Ed) *Social Dimensions of Autonomy in Language Learning* (Palgrave Macmillan 2014.5) は社会・文化環境の文脈で学習者の自律を論じた研究書である。

第二言語習得研究については、Vivian Cook & David Singleton. *Key Topics in Second Language Acquisition* (MM Textbooks) (Multilingual Matters 2014.5) と Bill VanPatten & Jessica Williams. (Eds) *Theories in Second Language Acquisition: An Introduction* (Second Language Acquisition Research Series) 2nd. edition (Routledge 2014.12) が入門書として充実した内容である。Shawn Loewen. *Introduction to Instructed Second Language Acquisition* (Routledge 2014.7) は教室での第二言語習得について理論、研究、実践の面から扱っている。John Truscott. *Consciousness and Second Language Learning* (Second Language Acquisition) (Multilingual Matters 2014.11) と Kata Csizér & Michael Magid. (Eds) *The Impact of Self-Concept on Language Learning* (Second Language Acquisition) (Multilingual Matters 2014.9) はそれぞれ、第二言語学習における「意識」と「自己概念」に焦点を当てた研究である。

動機づけの研究では、Zoltán Dörnyei, Peter D. MacIntyre, & Alastair Henry. (Eds) *Motivational Dynamics in Language Learning* (Second Language Acquisition) (Multilingual Matters 2014.10) でダイナミックシステム理論などの研究の最前線を知ることができる。理論とともに実践も含めた書として、David Lasagabaster, Aintzane Doiz, & Juan Manuel Sierra. (Eds) *Motivation and Foreign Language Learning: From Theory to Practice* (Language Learning & Language Teaching) (John Benjamins 2014.7)がある。

指導法については、Nan Li. *A Book for Every Teacher: Teaching English Language Learners* (Information Age 2015.3) が教室での具体的な指導技術を教師に丁寧に説明する。タスクによる言語指導は、Mike Long. *Second Language Acquisition and Task-Based Language Teaching* (Wiley-Blackwell 2014.9) が理論、教材、指導法、評価まで総合的に論じている。Peter Skehan. (Ed) *Processing Perspectives on Task Performance*

(Task-Based Language Teaching 5) (John Benjamins 2014.4) はタスクの言語認知処理に関わる要因に焦点を当てた綿密な研究である。Miroslaw Pawlak & Ewa Waniek-Klimczak. (Eds) *Issues in Teaching, Learning and Testing Speaking in a Second Language* (Second Language Learning and Teaching) (Springer 2014.11) は話すことの指導、学習、評価について理論、実践、研究面で均衡のとれた書になっている。

最近の情報機器による言語学習も興味深い。CALL については概説書として Jeong-Bae Son. (Ed) *Computer-Assisted Language Learning: Learners, Teachers and Tools* (Cambridge Scholars Publishing 2014.8) がある。Mark Pegrum, *Mobile Learning: Languages, Literacies and Cultures* (New Language Learning and Teaching Environments) (Palgrave Macmillan 2014.7) はモバイル機器による英語指導の書で関心を引く。

評価・テストについては、Kathleen M. Bailey & Andy Curtis. *Learning about Language Assessment: Dilemmas, Decisions, and Directions* (Teacher Source), 2nd edition (Heinle & Heinle 2014.8) が言語教育評価の理論と実践を包括的に扱っている。Brian North. *The CEFR in Practice* (English Profile Studies) (Cambridge University Press 2014.7) はヨーロッパ標準枠についての質問に対して回答を行い、言語評価についての理解を深めさせる。

研究法では、James Dean Brown. *Mixed Methods Research for TESOL* (Edinburgh Textbooks in TESOL) (Edinburgh University Press 2014.12) が混合法について詳述する。Jean L. Turner. *Using Statistics in Small-Scale Language Education Research: Focus on Non-Parametric Data* (ESL & Applied Linguistics Professional Series) (Routledge 2014.4) は特定の母集団分布に依存しない統計的検定であるノンパラメトリック検定を主にした解説書である。第二言語修得の質的研究の研究事例は Danuta Gabryś-Barker & Adam Wojtaszek. (Eds) *Studying Second Language Acquisition from a Qualitative Perspective* (Second Language Learning and Teaching) (Springer 2014.9) が提示してくれる。

(名古屋外国語大学教授)